繪入八行本の發見

「淨るり本」の版式上における一つの發見を發表したいと思ふが、稍々專門的に亙るので、まづ「淨るり本」にどんな形式のものがあるか、「丸本（まるぼん）」とは何ぞや、「繪入淨るり本」とは何ぞや――といふことから、話を進めねばならぬ。

今日文樂座などで太夫が、見臺の上にのせてゐる淨るり本は「床本（ゆかぼん）」といふ大字の書（か）き本であつて、これを五行本ともいつてゐる。これは一段の切なり、中なり、口なり、端場なり、その床で語るだけを一冊に纏めてあるので、歌舞伎芝居の方でいへば、「書拔」に相當するものであるから、茲でいふ「淨るり本」とは自ら性質を異にするから除外する。

これを別として一篇の淨るりの首尾を盡く一冊に纏めてあるのが「院本（ゐんぼん）」である。今日淨るりの正本といふ「丸本」がこれである。「段物」に對して「丸本」の名がある。この「丸本」は歌舞伎でいへば「臺帳」に相當する。

今日現存する丸本の多くは、七行本である。この七行の丸本が始められたのは、正德元年九月十日刊

行の近松門左衛門作「吉野都女楠」からである。そしてこれより以前の作でも當つた作は、乃至今後繰返へして上演の見込のある丸本は、七行本に再刊してゐる。即ち義太夫の正本の底本は、正徳以降は七行本である。

この七行本が行はるゝに至つた正徳元年以前は、八行本が底本であつた。八行本が稽古本と稱へられて、太夫の直正本であつた。この八行本の最初の刊行は「聲曲類纂」には、「七ついろは」と「徒然草」を擧げてゐるが、勿論誤りであることは斷言出來るが、然らば何が始めての八行本であつたかと問はるれば答へることが出來ないが、八行本を底本としたのは、京の宇治嘉太夫、後に受領して宇治加賀掾となつた太夫からである。この加賀掾は可なり進歩した頭を持つてゐた。從來は各流派の節付を秘傳と號して、容易に人に示さない、その門人門流であつても曲節を知ることに苦心を拂つた。されば、加賀掾は、門人の書寫の稽古本では、已れが流派の傳播の至らざるを憾み、稽古本の版行を斷行したのであつた。尤も加賀掾の先輩である井上播磨掾が、大和少掾時代の寛文年代に、細字の節付本を刊行してゐる(花物狂)が、節付の大略を示したといふだけで、まだ節章(ゴマ)には及んでゐなかつた。

この時に當つて稽古八行本を新作興行毎に刊行し、且つ節章を附したのは、加賀掾の英斷であつた。

「操年代記」には、

「けいこ本八行を四條小橋つぼやといへるに板行させ淨るり本に諸のごとくフシ章をさしはじめしは此太夫ぞかし」

と加賀掾について記してゐる。この八行本が、前記の如く後には七行となり、或は其の以前においては十行、十一行、十二行のも往々にしてあるが、要は八行本、七行本が淨るり本の底本と見ていゝ。

この加賀掾が八行の底本を刊行する前は、俗にいふ「シラミ本」といふ細字本で繪入本である、古くは寛永以降殆んど盡くが、細字繪入本が淨るりの正本で、一方操看客の番付の用を足し、上演新作淨るりのテキストをも勤めてゐた。この「シラミ本」は、歌舞伎にあつても淨るりと同じ形式で、繪入の筋書の用と番付の用とを勤めてゐた。これを要するに、淨るりの最初の正本ともいふべき「十二段草子」が、語り物の形式でなく、「假名草子」ではあつたが、それ以來、年代にして寛永以降淨るり正本はシラミ本と呼ばるゝ繪入細字本であつたのを宇治加賀掾が、八行の底本を刊行した。

こんなわけで、婦女童幼のために番付の用をも勤めたシラミ本には、繪入の必要はあつたが、淨るりの底本である、且つ稽古本である大字八行本には、繪入の必要を缺いて來たから、フシ章を主とした八行本には、挿繪が無かつた。が、然し八行本とともに從來のシラミ本の刊行も併用されたが、漸次繪入細字本は廢つた。恐らく正德を限りに、或は長くとも享保の初年で、繪入細字本は跡を絶つに至り、淨

るり、正本といへば八行本七行本の稽古本を意味し、今日謂ふ「丸本」の概念はこゝに盛られる事になつた。これが淨るり本の版式のざつとした概略である。

ところで、本文に入つて八行の淨るり稽古本には、繪入が絶えてないとされてゐる。――又その種の發見もなく、水谷不倒氏著の「繪入淨るり史」にも、

（八行本は）……稽古專用のものなれば、これに挿繪を加へず。後世丸本と稱する稽古本は卽ち是なりとある。ところが私が最近不圖、私の文庫に加へた一本は、正しく八行の稽古本で、しかも繪入半紙本である。見開きにして五ケ所の繪入本で、その畫風は、シラミ本のそれで、上下二段に、雲形で輪廓をしたる入である。奥付には年號がない。――且つ終丁が落丁になつてゐるので年代は不明だが、裏表紙うらに、例の

右此本者依小子之懇望付秘密
音節自遂校合令開版者也

加賀掾

二條通寺町西へ入町

とあつて、いつもの「山本九兵衞刊」の六字が破れてゐる。そして「加賀掾」の下にあるべき、「宇治」の壺印も、「好澄」の角印もが、かすかに存してゐるだけである。

ところで、この繪入八行のこの淨るりの外題はといふと、初丁が落丁になつてゐるので、不明であるが、一讀して勘考するに、正しく加賀掾の語り物にある「義經懷中硯」である。內容は上中下の三卷もので、

（上卷）は、梶原景時に讒せられた義經は、腰越から京に引返へして快々として樂しまず、草履取喜三太を義經に、自分は奴姿に扮して鎌倉に入り、法然上人を訪ねたが、事志と違ひ、「いとま申してさらばとてみちのくさしてぞ下らせ給ふ」といふのが、通つた筋で。

（中卷）は、大路三筋町なる傾城町に靜がゐる。金賣吉次の弟吉內が大盡となつて豪遊する。靜は傾城の意地も張りも捨てゝ判官殿に貢ぐための金を吉內に無心するが聞かれない。靜は舞の衣裳を着て辨慶に裝ひ五條の橋の上で待つてゐると、吉內が來て、ソレと見るより兒姿になつて、渡り合ふ、といふのが「橋辨慶」のもぢり種。

（下卷）は、靜が作り山伏となつて傾城達を引連れて判官を訪ねて、みちのくへの道すがら、咎められて笈の內から、紅筆おしろいが出るといふので問答があるのが、舞曲の「笈さがし」の趣向である。全

體が「時代」でなくて、「世話」――傾城情味の豐かな作で、淨るりとしては變つた巫山戯た異色の結構である。

ところで、この淨るりの作者は、未詳。が、元祿十一年六月五日初日で、竹本座の手摺に、「義經東六法」として上演されてゐる。私は外題を逸したこの珍らしき繪入八行本を手に入れて外題を知らうとして苦心した。只一つの手がゝりは表紙裏に「本朝中古花鳥傳」と落書がしてあるので、加賀掾の語り物を、手の屆くかぎり調べたが、「花鳥傳」といふものがない。やう〳〵にして「柳亭淨るり本目錄」(三田村鳶魚氏編「未刊隨筆百種」本)で、左の三行の記事を見出した。

●義經東六法、同年(元祿十一年)六月五日、作は近松に似たり、初は本朝中興花鳥傳といひし加賀掾が古淨るり也

と、斯くてやう〳〵手蔓を得たのであるが、この初は「本朝中興花鳥傳」が、後には加賀掾が「義經懷中硯」として、加賀掾の段物集「加賀羽二重」に、この淨るりの上の卷を收錄してゐる。そして「義經懷中硯」としては、「外題年題」の寶曆、明和、安永、寬政の四版ともに、年代未詳であるが、加賀掾の語り物として揭げてある。これでこの「繪入八行本」の素性はハツキリと判明した。

後に心づくと、藤井乙男博士は、その「近松全集」の五卷に「未複刻の珍本」として近松の推定正本と

して「義經東六法」を收錄されてゐるが、それは勿論繪入本ではない。私のこゝに疑問として提出する所以は、「近松の作か否か」といふ意味でなく、八行の加賀掾の正本に、シラミ本同樣の版式で、繪入になつてゐるこの「本朝中古花鳥傳」を、繪入淨るり本の珍しい一研究資料として、博雅の御說を聽きたいといふのである。そして淨るり本の版式において、加賀掾の八行本が、一時代を劃するものとすると八行本の最初の刊行は何であつた？　黑木勘藏氏は、「版畫禮讃」のうちにおいて、「宇治加賀掾の正本研究」として、八行本の初めを、延寶七年五月の「牛若千人切」を以て、今まで發見された資料の最古のものとされてゐる。然しこの「本朝中古花鳥傳」の如き、この第一次八行本問題の一資料ともなりはすまいか。（昭和四年四月）